

江戸惣角物語

四

~ 13
3562
4

30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

門 13
 號 3562
 卷 4

種彦著
 疑此書他人之手者乎
 物種彦
 書名

大學圖書館
 第 346.3 號
 藏書

牛
 入
 清



田
 和
 大
 下
 總
 國

萬屋助六
 三浦屋總南
 江戸紫三人同胞四編

四めさがるのつゆ

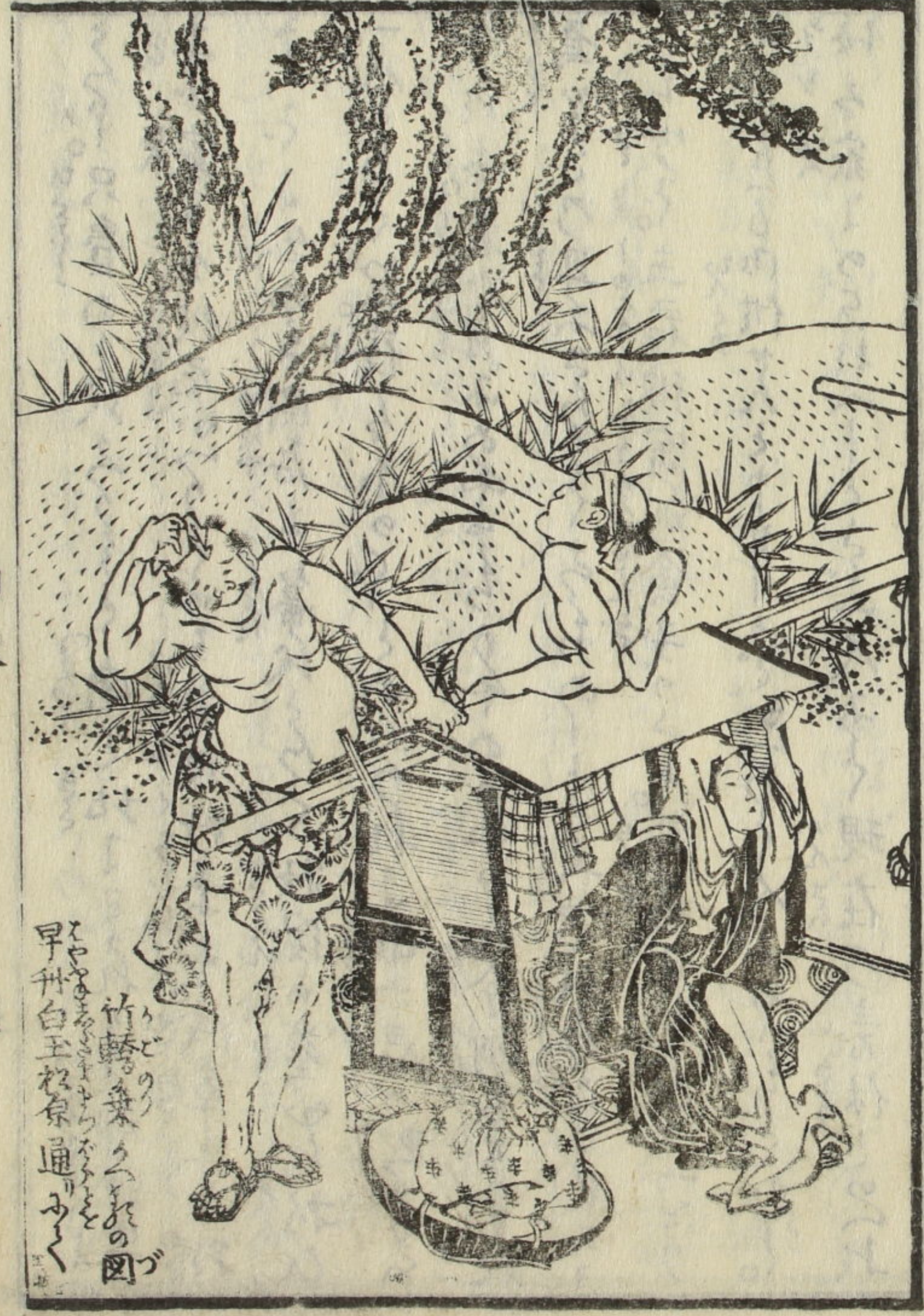
是るささく下總國大和田に住つ早舟尼の不日ゆく
 二百両の金銀と酒賣十兵衛が家におりむと。彼地形丸
 の富創反買ひく後助六が住所とくら後手こしむせし
 く。武藏國へ赴くと角田の渡り少時遠近は眺望
 れば長堤の楊柳春寺はやしむ。唯一声の鐘を響き日沈
 くと日暮りんとてや。ふ後と衆れとて、おとに守へ

種彦著

夫雨婦人叢
 交情姉妹
 如之假个打坊
 昔ハト善アリ民
 友儀ハ一ハハ
 ハ難解



竹
 白
 王
 松
 京
 通
 み
 く



竹
 白
 王
 松
 京
 通
 み
 く

竹
 白
 王
 松
 京
 通
 み
 く

らんら。只曾のくはくろく。南と北。日るれり。却説専
 子か家する。彼尼かつく。老母行業る。浅草寺に於
 ち。一と出ゆき。開巻を第紙とく。板縁の莖やれ。折ひ
 一人とく。いふ。夜々不のぐと。わけられ。助六君の。かつる。の
 ぶ。若し。才ふ。あや。ちり。や。の。や。せん。今。朝。を。さ。つ。て
 鳥。さ。乃。耳。ふ。さ。り。く。あ。ら。あ。い。う。ふ。や。は。専。子。を。し。る。
 くら。主。君。彼。密。劍。會。毛。の。と。ち。花。巷。は。か。ら。ひ。の。ふ。う。
 かる。日。と。も。由。世。と。せ。く。か。つ。く。人。は。あ。ら。う。の。あ。い。く。
 ぼる。兼。の。ら。れ。べ。と。一。人。あ。く。現。在。の。言。休。と。れ。

他人の教を知りつ。通ひも勇氣何内。怪我の教へ死い
 じ。鳥の口の。啼く。一。山。の。て。く。公。あ。ら。か。け。そ。と。言。倫
 とも。人。の。と。し。る。老。人。門。出。は。朝。負。専。子。の。と。い。家
 たり。と。同。専。子。立。出。つ。ふ。も。専。子。と。我。の。教。を。老。人。と。ら
 何。代。り。来。て。の。ふ。や。と。い。ば。彼。老。人。の。ふ。某。を。當。面。芝。津。村。住
 白。酒。の。た。ま。ふ。十。と。は。清。く。の。の。り。う。ん。は。三。賣。と。一。品。の。り。て。物。
 訪。ひ。や。せ。し。や。り。と。徐。く。と。お。通。り。是。又。又。と。竹。杖。を。手。に。置。て
 中。午。不。寐。中。が。う。取。あ。ぐ。と。い。ふ。ち。ち。あ。ま。し。劍。の。り。抜。た。を。ち
 くと。熟。見。の。れ。先。年。房。州。め。く。失。ひ。の。の。索。れ。蛇。形。丸。の

宝剣たからけんはたゞしだ。のちふもひかけぬと云ふれが。頼たのは言ことまふも
こと。少時まじのりく。老人らうじんはは剣けんいりて依よ故こゆりく。所ところ持もた
一ひとふと同一どうい。十じゅうもほまきく先頃せんこん今本の橋はしさうりのちりく。不ふ斗と
其宝剣そのたからけんと買かへき。は頃密こんひつは少まじがは家いえの主ぬしは剣けんは然しか印いんの
ふ。町人まちびとは似にえやく刀かたなと所持ところもたせんく。賣代うりしろはく利り派はひ
んとむりく道悦みちえつを買かふくめらねむと云ふや。今いまあものと
二百両にひゃくりょうの金かねのへ人のちを賣うりてしすせんとののりけいひ
はま。専せん子し貞てい頭づかみ世よはれはれ剣けんはとては方かたも印いんは所ところ
ちのしと。二百両にひゃくりょうと多おほき金かね。今いまはくもくも相達あひたつはく。

三五日さんごにちまらしくめらんとく。老人らうじん頭づかみとらうらう。は宝剣たからけんは
非ひふ買かえんしく。こが方かたは買かえんしく。異所いところ二百
兩りょう花主はなぬしのりく。とよめめと金の早はやと方かたはせん。今日けふ日
ハの隣となりのりく。奥おくのりく。一室ひとむろはく。一職ひとしやくはく。道の勞らうれは
中なかつにめんく。金かねと人の人ひと。さうらさ。時ときは彼方あつちへうり。こたはせん。と
其期そのき我われと恨うらみひひそと。言ことまふはとちら。派は門かどのあけつらねた。
中なかつにめんく。唯ただ手ては又またき。藝ぎはとく。只ただ音ねかりひらぐらさねる。
園そのをさうらう。とて。居ゐる。所ところは先まづにさうらひ。諫いさなめひ。言ことまふ
し。似にえやく。今いまはあかりし。と。気色きしきは。え。のふ。と。ぬ。

女のこころをばしにばすまふのれど。諺ふも三人のりすれば文珠
 菩薩の智慧のりとやうん。内月花巷よちのむと。助六の
 首尾と聞えぬが。其後更と謀りつゝひるまゝ車平宜
 ざつと美く。彼老人と取逃さば。心とてよよと秘傳く。
 柳町へと急を行ぬ。関屋と後戻えらうく。少時涙くくも
 くれがやのりく。顔紙のげ。よく帰らぬ。周諒なう。げのり不
 美つてくく。更をう。内兄才の。内流浪。刺瀬。ひら。君の自
 害く。果たふ。仇人とりよ。主君の。仲又君。せめく。宝剣。金美
 ば。し。助六。君。世。し。出。し。や。い。せん。と。夫。婦。の。り。の。が。愛。親。難。

焼物師とらうらうら。ぐと。心。む。じ。ふ。め。ら。う。電。々。う。も。細。く
 ぬ。ふ。其。日。と。言。う。ら。う。と。の。宝。の。在。所。を。志。し。や。が。う。二。百。両。と
 二。金。の。才。覚。ま。ば。の。苦。紙。や。と。り。んと。今。の。や。う。ふ。言。つ。れ。ば。三
 人。四。人。の。う。ら。う。ら。う。も。相。達。せん。と。ち。ひ。ひ。も。う。と。て。は。男。の。顔。が
 ぬ。く。年。も。若。う。く。あ。れ。う。ら。う。花。女。偶。偶。よ。か。と。賣。く。も。半
 々。金。か。その。人。が。さ。う。う。も。と。て。木。槿。華。が。む。れ。り。の。め。あ。ら
 しく。も。落。く。の。と。く。と。妹。の。後。家。や。あ。の。夫。と。知。し。う。と。ど。
 是。と。く。も。や。花。街。の。め。と。ど。か。れ。う。と。け。し。得。う。と。ど。う。や
 乾。宿。世。の。因。果。と。数。行。の。涙。と。め。り。う。の。り。あ。う。く。く。あ。う。敷。し

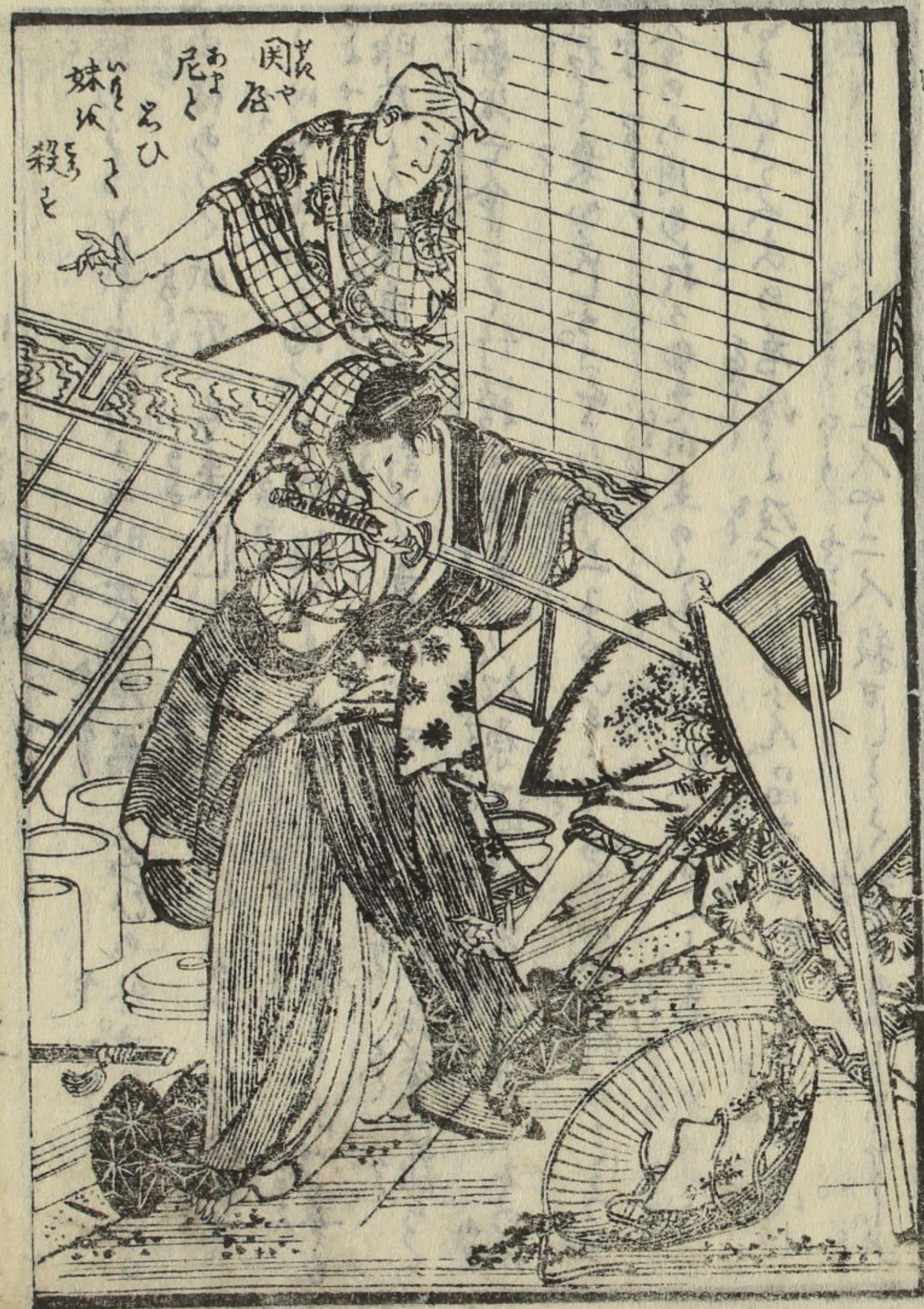
が鳴守位とて金銭得べき思案ありし又男のかちひら
 うらむとて討束めおぼせし母の故不問めおぼせし
 茶とて待し待せんとと投首し立あがり庭のひびき
 聞かせ先下尼の乗ゆは竹橋の家とわがけ走り来ぬ
 園をふりふりく芝蔭すくひり救町の道りれよとくも
 飯う来足しと不斗縁先の草の菴がさふ目次とめさくち
 笠取とて世し由へ取れりしゆめゆめ彼尼昨夜とてふ
 わづけ一ひらり二百両のやうの入まき縁故りよと彼金とめ
 り宝剣を買ひりごとん天道貧女が忠節感感のりよ

は金銭よ(ま)しうらふとて尼君も用をき金銭の
 中言はしとて多し金銭貸し人道にせし忠実故
 りん或人々を害し或ち盗賊とらるめ例をよめとて寧
 け尼と殺言し金銭をひく。主良人の御成遂させし
 一妻々あましく自害せん是よとて良計ありしと心強
 も急刀をきりし後よかくし。ち門田に昇来ぬ竹橋
 側らう立ゆとて尼君は内金銭とて世しゆとて立ぬり
 せんと言ふよ。ちどりの眷らう真昇よ切くかど人殺
 一のりらとて竹橋が庭さふらうとて根根らう

く逃く甲の園を々気も逆のちう。南无阿弥陀佛と口は唱
 名竹袴をたどのうよりしる。柄ゆらけよと突通せ内よ
 々女の叫ぶ声。鮮血手ふまてまらう。園を々そのち倒れ吐
 涙よりとらうひう々々。尼君さぞし非道の女と名もひのん
 か是うら一席よつじがさぞおぼがりの付る。其要やうと
 のちやうが忠美めさめふやうてうさう。金の才覚趣舎思
 業うらぶ。立かえうのひーと。昨夜まて金多よりらうと
 立女よあせのひーが肉の不運。まらうぬ夏と知りけ
 殺害し。その金うらうけやう頼て立女も自害し。黄泉やう

よく合説いへ侍ん。おぼしめると尼君といふのも。奥よ
 りやせんと。側衣かつてえつ。竹袴より尼と引出さんと。神衣
 ばあちうう小墨ほろめ振袖ふ。まろ色よめひ摸振行
 袴のうらうらさも昔けりお声うい。さうさう。姉よ
 ちうさうやとさう。かどうき。簾をあけし出せがひと
 ね妹の白玉肩犬とさう。とさう。お息もさう。あつさま
 りしう。あやりの夏よ涙も出と。尻房よ撞と倒れおし
 母朽まると立故。仔細と垣の外。面よ歩。まらう何とせん
 けしやと。白玉と抱とせ。園を々もみとらうとらう。けし竹

関原屋帰
 浴ヲ見妹
 殺ス日
 貴ノ高尾
 燭ハマカラス
 即チ増ミツ
 心
 関原屋
 轆石
 乗客
 殺
 笑ニ



関原屋
 物
 取
 高
 一
 夫



関原屋
 轆石
 乗客
 殺

袴のうちに寝たる。たうふ昨夜の尼君と名ひの外其方へのける
 由縁ありては所へも来りしぞ。公とどふそたりふのち。松子流り
 とゆせしと。さへぐと介抱りてふ白王御顔のあけ妻も
 昨夜より總角主と計り意休が所持の宝剣取棄ひ難く
 廓城亡命し竹袴に乗来り。松原通りの茶亭あり。その尼
 君に乗せし。さうら姉上もいし下。その宝剣のころさ
 金の入用ありゆえ。主のさあゆむ。いし。妻と先の尼君と
 ありいし。まの為体よ及びし。品をわかれ。悲しみのよ。いし。

宝剣をく。さへ。まを。活く。用。花。蒼。う。追。手。が
 かり。捕。つ。と。と。と。取。の。も。と。死。ね。る。ま。期。の。う。や。れ。さ。や。と。ふ
 つ。り。の。へ。い。ご。う。く。母。さ。ま。姉。さ。ま。か。あ。ふ。お。お。取。楽。し。ふ
 影。透。く。来。り。し。ふ。り。う。眼。が。又。へ。ぬ。内。顔。の。え。え。ぬ。が。悲。しい。と。閑
 花。み。ひ。し。と。い。ふ。つ。う。美。意。ち。手。負。氏。抱。く。人。お。理。や。り。母。上。の
 ま。は。ま。ま。心。さ。た。ふ。り。う。く。ま。と。神。ら。ひ。ま。ま。で。戻。さ。し。
 こ。ま。と。い。い。つ。と。と。と。半。負。々。苦。し。と。息。を。と。と。さ。だ。め。く。松
 子。々。助。六。君。う。う。少。め。ま。つ。ひ。ん。姉。さ。ま。よ。別。れ。て。い。し。ま。ま。
 休。の。強。悪。非。道。現。在。甥。の。側。女。早。舟。の。く。り。ん。坂。を。さ。ま。と。死。

小取ことりとらり。是喃これなん母上ははの上妻先つまのまへのりふく。宝剣たからぎん瓜うりねとてとらり。刺さ
 摩ま走はしる主ぬしの眼まなことらりてあつては忠義ちゅうぎとて言いひなつては身みの盜ぬす
 賊あしひらの忠名ちゅうなを逃にがしとぞ。姉上あねさまの手て瓜うりくく。天あまの罪つみをしめし
 ちよとけら恨うらみお夏なつの更さらしやしや上うへ不ふ行ぎやう等らうつらつら悲かな
 い憂うれめふあひ。他人たにんの事ことあつて死しんん。姉あねの事ことの事ことふかり。死しぬの
 妻つまちよとけらとて先まへの事ことは信しんじらう世よに候まをし侍さむらいの逆さかを
 ねとらり。姉あねの事ことは母ははの事ことに中ならじく。香か華くわ手ての事ことはさか
 未いま来きたの事ことはさか。依よ角かくねらうよよとてとらり。助すけ六む君きみも年としの
 小この事ことは侍さむらいの事ことに。位ゐの事ことは若わかく小この事ことは小この事ことは。

ちよとけら哀あはれとらりまらり。今いまちよとけら。口くち逆さか手てふ
 自みづか害げせんとてとらり。あひひとてぬ一ひと室むろらり主ぬしの事こと年とし走はしる
 出で関せきををカかの事ことはさか。南みなみの方かたの栄さか折を戸との事ことはさか。ひつとて
 助すけ六む總そう角かくかけらう。總そう角かくは涙なみだがら白玉しらたま瓜うり抱かかのは。是喃これなん先
 ちよとけら。残のこらむもの事ことはさか。歩あゆけらとて不ふ使しの者ものやとて
 ちよとけら。光あき景ぎやうやと歎なげ悔くわいは白玉しらたま瓜うりの事ことはさか。若わかくけりて声こゑをうのはげ。總そう
 角かくさぬとていひとらり。早はや阿あ絶たつの事ことはさか。助すけ六むも目め瓜うり
 ちよとけら。宝たから剣ぎん瓜うりねとて。花はな若わか瓜うり出でる小こ女めは依よ氣きやとて
 彼かの忠ちゅう心しん感かんををぬの事ことはさか。とらり。總そう角かくの事ことはさか。

再度氷上の家とてかきとべき時とされりと赤べが専卒のひらり。
 悲歎よせましく一大変といひのりなり。退却よるる日る老人
 地形の宝剣尻より来り。二百兩は賣べしとせしむと奥の
 一室ふまたせしむ。某々右の一点をふ知るせしむとせんとま
 出れよとみりくぞ。道より立ちえり。彼老人と殺害す。
 宝剣を奪ひとりんとるふりしめ。女房閑屋が金銀りらる。
 昨夜の尻とちひひさへくけり。体彼老人とひとひいば夏乃
 実不流にんと立ちあがらぬ。助六とてとめ。こが閑屋と知り
 つも。剣と賣らんと来ぬ。曲者おとすも。你さ仔細ぞあり。



彼々ちとてとれりとも。逃走とん理なし。されゆくは家よ
 宿りし大位を尻尻うべし。運つこめは難儀のがしりたな
 とひひきとる。北の方には柴折りの外向あり。強妻が徳あり
 一のほど。まじりも又それ由縁のうと立ちつる。彼尻より
 閑屋とて向り。かみええふり。尼も涙よらしむ。白玉が
 死骸よりちひえ。頭生は音。南无の弥陀佛と。ねめり
 ゆる。さく言はらん。知るるを是れもや。只いを夏乃
 がう。居らう。則は一所ある。助六の閑屋あり。あり。逢ま
 つ。さる。ち。め。く。し。ど。か。め。も。ち。び。の。ひ。え。ん。ま。い。ん。兄

牛本
池清

それらうし君の側女早舟うく侍とひたれぬ助六とて人
人かめひのけぬ夏ゆのどろり少時呆れく言葉も出さず
毎かきく言々うけ家へ来見老人も白酒あそぶす
とふ者うらま安如ぶく夏あく下徳圃大和田く一軒所
ろく空劍以買ふべし契約り。唯當所へ来見ある日
暮々とは家へ宿る今朝十時頃が全日頃うね芝崎村へ
つとむ。十時頃花川戸朝貞の専子ガ妹へあはると隣
家へ老人がりのざり立戻りく歩あくとむ。朝貞の専子と
る。昨夜宿りしは家づく。あつ々不思美なる夏もとく

